平常展

4月10日(火)～5月6日(日)
修法と曼荼羅

密教では、個人の願いを達成するために修法とよばれる祈祷が行われました。願の種類によって、祈りを捧げる仏も異なります。本展示ではさまざまな修法に用いられた仏教絵画を紹介します。

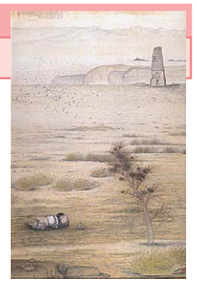
●大威徳転法輪曼荼羅図
南北朝時代 正平10年(1355)

4月10日(火)～5月6日(日)
永観堂禅林寺の襖絵と屏風

浄土宗西山禅林寺派の総本山・永観堂禅林寺(京都)には長谷川等伯(1539～1610)とその一門によるものなど多彩な障壁画、屏風が伝来しています。当館に寄託されている襖絵、屏風の中から「秋草図」、「蓮池荷葉図」、「檜原図・いろは歌屏風」を紹介します。

●秋草図(八面のうち・部分) 長谷川派
桃山時代 16～17世紀 永観堂禅林寺蔵

4月10日(火)～5月6日(日)
中国風景



日本絵画には、憧れの地であった中国の風景が多く描かれました。契丹展の開催に合わせて、日本の近世・近代絵画の中に見られる中国の景色や風俗を紹介します。

●荒涼　矢野鉄山　昭和8年(1933)
本館蔵 [矢野元一氏寄贈]

4月10日(火)～5月6日(日)
近世大坂の絵師たち

江戸時代の大坂では個性豊かな多くの絵師たちが活躍しました。当館に収蔵される作品の中から、林閬苑や上田公長など大坂ゆかりの絵師たちが描いた作品を紹介します。

●蟹子復讐之図　上田公長
江戸時代 19世紀　本館蔵 [小菅長次郎氏寄贈]

4月24日(火)～6月10日(日)
うるし ― 蒔絵・螺鈿・根来・漆絵 ―

寺院で用いられた朱漆塗の器(根来塗)ヨーロッパに輸出された南蛮蒔絵、大名婚礼調度、香合や印籠、小さなものから大きなものまで漆の器を一堂に。

●国宝　菊唐草蒔絵螺鈿手箱
南北朝時代　14世紀　熊野速玉大社

7月3日(火)～7月16日(月祝)、7月28日(土)～8月12日(日)
近代美術

昭和11年の開館からおよそ75年、寄贈や購入を通じて美術館に集まった日本画と工芸と大阪の洋画家鍋井克之の挿絵、辻元コレクション富本憲吉作品などの近代工芸を展示します。

●出潮　窠本一洋　昭和18年(1943)
本館蔵 [住友コレクション]

夏休み子ども企画　ビリケンさんが来たゾ!(予定)

7月28日(土)～9月2日(日)、9月11日(火)～10月14日(日)
中国彫刻

日本を代表する中国彫刻コレクションとして知られる山口コレクションを中心に、南北朝・北魏～唐時代(5-8世紀)の石造仏教・道教像を展示します。

●石造 菩薩交脚龕
北魏 5世紀後半
本館蔵 [山口コレクション]
●石造 如来立像頭部 [河南省龍門石窟奉先寺洞将来]
唐 8世紀前半　本館蔵 [小野コレクション]

9月11日(火)～12月9日(日)
日本工芸 ― 金工・陶磁 ―

田万コレクションの和鏡類、有田焼と京焼、田原コレクションの鍋島藩窯の染付・色絵など、日本の原始から近世までの陶磁器・金属器を中心に展観します。

●重要文化財　青銅 松喰鶴文鏡
平安時代　12世紀
本館蔵 [田万コレクション]

9月11日(火)～10月14日(日)
たっぷり見たい屏風絵

あでやかな極彩色の花鳥図から、静けさをたたえた墨絵の山水図まで、バラエティ豊かな中世・近世の屏風絵約20点を厳選し、その魅力をたっぷり紹介します。

■2012年度後半(9月～3月)の平常展(予定)

仏教美術	11月6日(火)～12月9日(日)
仏教美術・中国工芸	2013年1月10日(木)～2月11日(月・祝)
雛人形	2013年2月23日(土)～3月17日(日)
光琳資料	2013年2月23日(土)～3月17日(日)
根付	2013年2月23日(土)～3月17日(日)
描かれた女性たち	2013年2月23日(土)～3月17日(日)

蒔絵研究から見る光琳資料　―「梅花蒔絵箱下絵」再考 ―

一月七日から二月五日まで、特別陳列「光琳資料をひもとく」を開催し、昭和十八年に武藤金太氏からご寄贈をうけた当館所蔵と、京都国立博物館所蔵の小西家旧蔵尾形光琳関係資料のなかから、光琳関係と雁金屋関係の文書、画稿や下絵、蒔絵下絵を陳列いたしました。

光琳の子寿市郎の養家である小西家に光琳に関する資料類が伝えられていることは酒井抱一(1761～1829)の時代から知られており、二百回忌にあたる大正四年(1915)前後からはこの資料を用いた研究が徐々にすすめられていました。そして昭和三十七年には『小西家旧蔵光琳関係資料とその研究』が山根有三氏によって上梓され、昭和五十三年には資料の大半が重要文化財に指定されました。

これらの資料は光琳の事歴、光琳画の研究の上では欠くことのできないものであり、また東福門院徳川和子の御用を勤めた光琳の生家、尾形家の家職である呉服商雁金屋関係の文書は染織史研究に積極的に用いられてきました。しかし多数含まれる蒔絵下絵と称される資料については、公刊された図版が小さなモノクロ印刷であったこと、そして本館所蔵分以外の大半が個人蔵であったことなどから、長らく研究がすすんでいませんでした。しかし近年光琳資料の蒔絵研究からのアプローチは内田篤呉氏によって端緒についたといえます。同氏と漆芸作家である室瀬和美氏の調査にご一緒させていただいたことから、光琳資料に関する蒔絵研究の重要性に改めて気づかされました。

当館に勤めはじめた頃、所蔵品である「梅花蒔絵箱下絵」〈右図・260〉を調査し、裏面にある墨書を表側から漆でなぞったあと、表面に記された「此所よりおきめニ」の文字から、これが漆器制作において置目として使われたことを知りました。平成十四年に当館が京都国立博物館所蔵の光琳資料をお預かりすることとなり、「梅花蒔絵箱下絵」と同じ形状を持つ「竹蒔絵箱下絵」〈12-2〉、「草花蒔絵箱下絵」〈左図・12-3〉を比較する機会を得ました。この三点は一見よく似ているのですがそれぞれ異なる性格の資料とわかります。

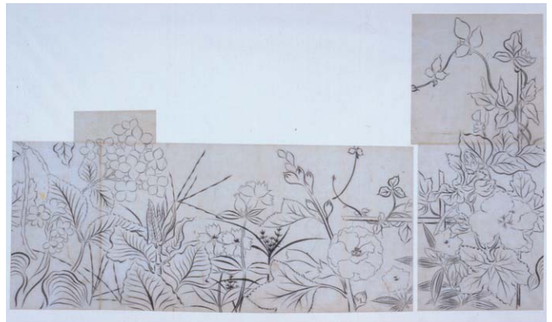
置目(おきめ)とは「蒔絵の下絵を漆の面に転写する方法。美濃紙に描いた下絵の輪郭を、裏から胡粉などでなぞり、これを器面に押し当てて転写する。」と『大辞泉』にあります。胡粉のかわりに焼いた漆を用いることもあります。「梅花蒔絵箱下絵」に見られる赤褐色の線は漆による描線です。モノクロ図版を見る限りでは三者は同じに見えたのですが、「草花蒔絵箱下絵」と「竹蒔絵箱下絵」は墨で描かれたもので、褐色の漆で引かれた線は見られません。三者の形状はよく似ています。四側面の模様は連続して繋がり、さらに模様は正面から立ち上がり、蓋表に連続することがわかります。

このうち「梅花蒔絵箱下絵」と「草花蒔絵箱下絵」とはほぼ同じ大きさです。試みにこれらを複写して組み立ててみると、「梅花蒔絵下絵」はほぼきっちりと箱形になり、「草花蒔絵箱下絵」も側面の紫陽花の花の先端の部分が蓋表にはみだすことをのぞくと、ほぼ箱形にくみ上げることができます。どちらも高さが三十六cm前後で小さな重箱ぐらいの大きさになります。これに比べると「竹蒔絵箱下絵」は高さが四十二cmと少し大ぶりで、下絵をそのまま組み立てようとすると蓋表の周囲に比べて側面の幅が足りません。つまり完成した下絵として使うことができないのです。

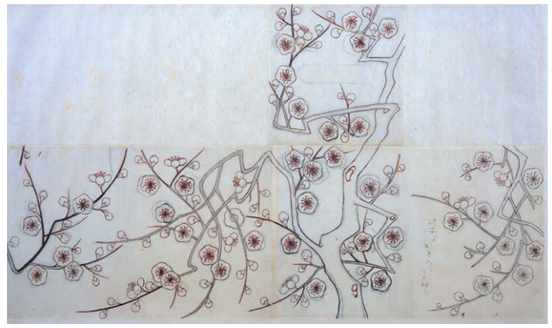
このことから下絵として作られ、一度は漆器を作るための置目として使用されたのは「梅花蒔絵箱下絵」のみであり、ほかの二点は完成された下絵ではないとことがわかります。また「梅花蒔絵箱下絵」には、蓋表となる部分に提手金具を取り付ける位置、あるいは提手金具を通す穴を穿つ位置を示す薄い墨線が見えます。そのためこの箱は重箱や菓子箪笥、あるいはその被い蓋として作られたことが推測されます。

紙面の都合で今回とりあげることができたのは「梅花蒔絵箱下絵」を含む三点の箱下絵のみです。これらの三点も字数の制約により下絵としての性格の違いを述べたのみで、図様の特色についてはふれることができませんでした。小西家伝来光琳関係資料として伝わる下絵類は光琳か、光琳の周辺か、後世の人物が描いたものなのかの判別が困難です。また実際に光琳が蒔絵制作にどのように関与したかを示す決定的な証拠はそこにみいだせません。しかし資料に含まれる下絵、画稿類は、蒔絵研究の視点から見直すと、新たな発見がたくさんあります。今後も徐々に研究をすすめご紹介できればと考えています。(土井久美子)

※文中〈 〉内番号、大阪市立美術館分は収蔵番号、京都国立博物館分は至文堂日本の美術462『光琳芸術の基層』(狩野博幸著)で用いられている番号です。



●重要文化財　草花蒔絵箱下絵　京都国立博物館



●重要文化財　梅花蒔絵箱下絵　大阪市立美術館